

# 湯浅克衛文学と母胎としての「水原」

——『カンナニ』を中心に——

南 富 鎮

1

湯浅克衛は、1935年4月『文学評論』と『改造』に、それぞれ『カンナニ』と『炎の記録』をもって作家としての出発をなしている。氏の代表作ともいふべきこの二作が、同年同月に発表されたことは、湯浅文学が出版当初から抱えることにならざる二つの方向性を示すものといふこともできる。それは、朝鮮への興味と移民への問題であるが、まだ初期の時点ではその二つの問題が結合したかたちで、朝鮮に定着する日本人の移民に関わる問題として取り上げられているように思われる。そして、湯浅文学の出版をなすこの二つの作品は、いずれも朝鮮の水原を舞台にしている。もちろん、この二作以外にも氏の作品には、水原を舞台にしているものが数多くあることから、湯浅文学には水原が非常に重要なモチーフになっているといえる。水原は湯浅克衛が幼年期以来を過ごした町である。一人の作家が自分の育った町を描くのは、なんの不思議なことではない。しかし、湯浅の場合は、執拗に水原を描いていて、彼が描く朝鮮を舞台にしている作品の多くが水原を舞台にするか、あるいは水原と

なんらかの関わりをもっている。とすれば、水原というのは、湯浅文学において、ただの朝鮮の一定の場所としてはすまされない、ある特別な意味をもつ場所としては考えられないだろう。以下、湯浅の作品中、水原を舞台にしている作品を取り上げて、湯浅文学における水原がもつ意味を考察してみよう。その前に、まず水原の街の歴史と湯浅文学によく登場してくる水原のいくつかの場所について紹介する。

2

湯浅克衛の長編小説『城門の街』の冒頭には『発展せる水原』という本が紹介され、その緒言の部分が大きく引用されている。著者は酒井政之助(作品では赤井政之助)、大正三年九月に出版されたもので、水原の街について総合的に書かれたほとんど最初の本である。<sup>1)</sup>『発展せる水原』は同氏によってその内容の一部が補われ、後の大正十二年十月、『水原』という題で再出版されている。しかし、この『水原』の付録には、「水原と人」という欄があり、水原で活躍した日本人名士の名前がおもに並んでいるなか、湯浅克衛の父親湯浅伊平の名前も確認できる。<sup>2)</sup>という

ことから、この二冊は当時の水原の様子をみる恰好の本であり、また、『発展せる水原』は湯浅文学とも密接な関わりがあることから、この二冊を参考にして水原の街を簡単に紹介しよう。

水原は、李朝第二二代の正祖王が悲運に倒れた父莊獻世子の死に心を痛め、陵を守り、自ら参拝するために、父の花山陵の近くに建造した城郭街である。当時の科学者の努力と三七万人の労力により、約三年の工事期間を費やし、一七九六年の秋に完成された。城壁は八達山の稜線から山麓にかけて周囲五キロにわたっており、その城壁にそって南門の八達門をはじめ、北門、西将門、華虹門、蒼竜門、練武台、訪花随柳亭などがの諸施設がある。華城が完成した時には、正祖王によって首都を移転する計画までなされたが、それは周囲の反対で挫折したという。この華城が後に水原と名前を変え、日帝時代には、朝鮮総督府勤業模範場（現在の農村振興庁の前身）、蚕業試験所、李王職牧場、高等農林学校（ソウル大学農科大学の前身）などが設置され、朝鮮農業の中心地となった。以下、作品に出てくる場所について略述する。

- ・八達山・水原の背後に位置し、城内が一目で眺められる。その頂上に西将台がある。中腹に水原神社がある。『カンナニ』では、カンナニと竜二が万歳事件のときにこの山に登っている。
- ・四大門・八達門（南門）、長安門（北門）、蒼竜門（東門）、華西門（西門）をいう。八達門は八達山山麓の二層楼閣で、水原城を代表する門。その近くに市場（南門市場）があることから、水原を背景にした湯浅の多くの作品の背景になっている。
- ・華虹門・七つの石門からなっている水原最高の景勝地。旧韓

国時代の一円貨幣にも印刷された風美明光の場所。それと隣り合わせに訪華随柳亭がある。湯浅の多くの作品に登場している。『カンナニ』では、カンナニと竜二がこの近くで将来結婚することを約束する。また、作品には朝鮮人に殺害された「野口をぢさん」の話が出てくるが、その野口巡查部長の追悼記念碑が万歳事件の後、在郷軍人会と警察の協力で華虹門の脇の芝生の上に立てられたという。

- ・華川・光教川、水原川ともいう。華虹門の下から水原城内の真ん中を流れる川。その川沿いに城内と城外の二つの市場がある。『カンナニ』では鮮童たちが独楽遊びをしたり、洪水の時に流されたりする。

- ・北池・萬石渠ともいう。北門の郊外にある蓮で覆われた景勝の池。『カンナニ』では、カンナニと竜二が釣りにいく。

- ・市場・華川沿いに城内と城外の二つの市場がある。城内市場は城内の真ん中に位置し、おもに牛市場が中心になっている。現在の中央野菜卸市場。場外市場は八達門（南門）近くにある。現在の南門市場。市場は水原を描く湯浅のほとんどの作品にみられる重要なモチーフである。

- ・水原神社・八達山の南中腹にある、伊勢大廟の分神で大正六年建立。百余の階段を登った社殿では水原城内が一望できる。そして神社の少し上の方に国旗掲揚台があった。

- ・練武台・東将台ともいう。蒼竜門の北にある将卒練武の跡。カンナニの血にまみれた銭袋がこの近くで発見されている。

『カンナニ』が発表されたのは、前述したように、一九三五年四月の『文学評論』であるが、この作品はもとと一九三四年二月末日締切の『改造』の懸賞小説に応募していることから、実際に書かれたのは発表時期より若干さかのぼる。しかし、発表時においての『カンナニ』では、夥しい伏字があり、また作品の後半になる四十六枚分が削除されていて、その全体像を見ることはほとんど不可能である。幸いに、戦後の一九四六年、創作集『カンナニ』によりこの伏字と削除の部分が復元され、そこには若干の異同がみられるなどの問題は残っているが、<sup>(3)</sup>おおよその全体像を見ることができ、以下、その内容を簡略に紹介すると、

世界大戦が終わって間もないころ、母とともに朝鮮の水原に移住してきた竜二は、カンナニという朝鮮人少女と友達になる。巡查の父親が水原の李根宅子爵邸の請願巡查を兼ねていたため、一家は子爵邸の一隅に住むことになったが、その門番の娘がカンナニであった。すぐ親しくなった二人は、将来大人になったら、お互いに婿と嫁になることを約束する。そして、二人は城門の外まで遊びに行ったり市場を歩き回ったりしながら親密さを深めていく。その中で竜二はカンナニを通じて朝鮮を少しずつ理解していくことになる。そんなある日、万歳事件が起る。それを見にカンナニと一緒に出かけた竜二は、カンナニからモンロー主義や民族自決主義、そして万歳をとなえれば、朝鮮は独立できるという話を聞かされ、二人は万歳を叫ぶ。その

直後、鎮圧に現れた日本兵によって銃が乱射され、教会に逃げ込んだ朝鮮人は教会もろとも焼かれてしまう。その事件の後、カンナニが家に戻らないため、竜二は父と一緒にカンナニを探しに出かけるが、カンナニは見つからず、カンナニが竜二のために作っていた完成寸前の小銭袋が血塗れになって落ちているのを発見する。これを見た竜二は、カンナニが日本兵に殺されたに違いないと断定する。

『カンナニ』は発表当時の編集者の付記からも窺えるように、<sup>(4)</sup>一九一九年の万歳事件が大きな時代背景になっている。そして、作品中の朝鮮人が逃げ込んだ教会が焼かれる場面は、水原で行われた堤岩里虐殺事件を思わせ、万歳事件で犠牲になる少女の死は、柳寛順のイメージとつよく重なっている。<sup>(5)</sup>一方、作品舞台については、明示はされていないが、作品に出てくる固有名詞と町の情景から水原であることが簡単に推測できるようなになっている。つまり、この作品には水原で起こった万歳事件がおもに扱われており、それはほとんど疑う余地がない。しかし、作品の中では万歳事件だけではなく、その舞台になる水原という町がさまざまな形で織り込まれており、それが作品の内容とも緊密な関係を保っている。

まず、竜二の一家が水原に定着することになったのは、  
 四国の果の海辺の故郷の町で生鏝工場を誠になつた父親は、  
 はるばる朝鮮に単身職を求めにやつて来て、その頃として  
 は職工生活などよりはずつと割のいい総督府巡查の口にあ  
 りついた。月給はともかくとして、五割の植民地手当は有  
 難いものだと母親に手紙をよこしたのを竜二は聞いたこと

があつた。丁度世界大戦が終つて間もないころで、朝鮮では憲兵制度が巡査に置きかへられ始め、物情播然とした世相なので、巡査が大増員されて待遇もよかつた。

というように、竜二一家は日本ではこれ以上暮らせなくなり、いわば喰いつめてから朝鮮に渡つたのである。湯浅の作品に登場する朝鮮に暮らす日本人の多くが、日本を追われるようにして朝鮮に渡つてゐるが、竜二一家も同様の事情で朝鮮を目指したのである。これは、湯浅自身の経験や当時の歴史的な事実とも重なつてゐるが、それはともかく、竜二の父親は日本では職工で苦しい生活を余儀なくされてゐたが、朝鮮に渡つてからは総督府の巡査という支配階級にいきなり上昇してゐる。それを母親は「内地にゐれば判任官四給俸の月収」などと誇りに思ひ、一家中は「父親の出世を喜んで団欒は賑かに楽しかつた」のである。さらにその父親は水原の李根宅子爵邸の請願巡査も兼ねてゐたため、屋敷と請願手当ももらへることになり、竜二を中学まで通わせることもできるようになる。このように竜二一家の安楽な生活はすべて朝鮮に渡つてから得られたものである。となると、竜二一家にとつての朝鮮というのは、今までの惨めな境遇を一変させる恵まれた土地で、とくにその中でも水原こそ、竜二一家に祝福された新天地だつたということになる。

その水原で竜二はカンナニに出会うことになるが、カンナニ一家にとつての水原は、竜二一家のように必ずしも恵まれた場所ではない。カンナニ一家は李根宅子爵邸の門番という卑賤な身分に落とされてやつと暮らしてゐるからである。しかも、カンナニ一家が最初から卑賤な身分であつたわけではなく、日本に

よる支配が始まつてから急激に没落してゐる

私の家でも——とカンナニは云ふのである。——家を潰された。持つてゐた田畑はいつの間にか新しい地主のものとなつてゐた。そんなはずがないから刈入れをしてゐたら、巡査がやつて来て父をらうやに入れ、父がやつてゐた書堂は、悪いことを子供等に教へるからと戸を釘づけにしてしまひ、子供たちを無理やりに普通学校に入れてしまつた。それで父は昔出入りしてゐた李根宅に頼んで門番にしてもらつてやつと暮してゐる。

カンナニ一家が土地を失つたのは、総督府によつて推進された土地調査事業によるものであろう。一九一二年八月の土地調査令の発布とともに本格的に始まつたこの事業は、申告による土地所有権を認定するものであつたが、法律への経験と知識も少なかつた朝鮮農民は申告をおこたり、土地を取りあげられたケースが多かつた。カンナニ一家もこういうケースで日本人の「新しい地主」に土地を奪われ、父親は書堂の先生まで強制的に辞めさせられたのであろう。とすれば、竜二一家は日本から水原に移住してますます安定していくが、カンナニ一家はもとから水原に住んでいながらますます没落していく構造なのである。つまり、水原という街は、最初から二人にとつて非常に対照的な街として出発したのである。水原はこういう根本的に対立した町の構造を内在しながら、また一方では、二人の友情をはぐくむ場所としてのさまざまな役割をも果たしてゐるのである。

まず、二人の親しさを示す場所としての華虹門が登場する。

作品での竜二とカンナニの話は、華川の河沿いから華虹門のほうに移動するところから始まる。結婚式の行列に会って、その見物のために竜二とカンナニは華虹門をぐるっと回ることにしたのである。結婚式は華虹門の近くで開かれていて、それを見た二人はその美しい光景に感激する。二人がそこで見た花嫁の姿は、まさに「頭の王冠が金色にピカピカと光り衿の虹の色がひとときは可憐」な姿であった。それを見たカンナニは突然竜二に将来自分を嫁としてもらって欲されるか聞く。

カンナニは竜二の脇の下をつつきながら、  
「ね、竜二」

と問ひかけた。

「五十円で買つてくれる」

「ああ大きくなつたら」

そして、友達のおンニョナーは、

「竜二は日本人だもの、お金がなくなつても結婚式できるよ。

竜二は大きくなつたらお金持になるよ。日本人だから。カンナニは幸せな奥さんになる。ね、カンナニは幸せ者よ」といって二人をからかう。カンナニと竜二の親しい関係が一番よくあらわれたところである。そして、その背景として華虹門が配置されている。華虹門は水原の城門のなかでも一番華麗な場所。「水原第一の勝地」とも言われているところである。そこで二人がみた花嫁の「頭の王冠が金色にピカピカと光る姿

は、そのまま華虹門の〈華〉にあたり、「衿の虹の色がひとときは可憐」さはその言葉とおりの〈虹〉になって二人の将来を暗示するものになっているのである。つまり、華虹門という実際に華麗な虹の形をした門の前で結婚式を見物した二人は、またその花嫁の装束から華麗な虹色の華虹門を再発見したのである。それで二人も華虹門の近くでそのような将来を約束することになるのである。華虹門が二人の親密な関係を象徴する場所として実によく機能しているといえる。

その後、洪水のときには、二人は水原の城内を流れる河沿いに出かけ、家が流されたり、川辺でマクワ瓜を拾おうとした子供たちが洪水に巻き込まれるのを目撃する。それを見た竜二は、「鮮童たちがマクワのために、そんなに必死」になる理由が分からなかったが、カンナニに触発されるかたちで、「ずーつと後になって竜二にもわかつてきた」りするのである。つまり、朝鮮の人たちの大部分は、「米の飯などはおろか満州粟や稗さへ、満足には食べられなかつた」ので、夏はマクワを常食にしていたため、「そんなに必死」になっていたのである。竜二はこのようにして、徐々に朝鮮の事情を理解していくのである。そして、そういう理解に導くのがいつもカンナニだったのである。そのカンナニに感化されるかたちで、竜二のカンナニに対する気持ちと朝鮮への理解が深まり、それが時には行動としても現れることにもなる。学校の帰りで、「六年や高等科の悪太郎」たちが普通学校の朝鮮人の女生徒をいじめている光景を目撃した竜二は、それをカンナニだと思い、懸命に保護しようとし、さらに翌日の作文の時間には、そのことを取り上げ「可哀さうな子を

いぢめたりする日本人を憎みます。そんな日本人は朝鮮から追  
い出したらしいのです」と猛抗議しているのである。

しかし、なによりも、二人の親密を深める恰好の空間が市場  
であつた。市場は水原に住む日本人にはほとんど禁忌の場所で、  
水原のなかで唯一の朝鮮人だけの空間になつてゐるが、その市  
場が竜二にとっては一番安心できる場所だつたのである。それ  
で、カンナニは「市の日にはきまつて四街里の街角に立つて」  
竜二と待ち合わせることにしてゐた。竜二にとつて市場という  
空間は、そこに入る前には、周りが氣になつて落ち着かないが、  
一端「市場の中にはいつてしまへば、もう安心」できる世界な  
のである。そこには二人をいじめる「悪太郎」のような「日本  
人の小学生もるな」く、親など周りの日本人の目にも氣がねす  
る必要もない。その点、カンナニも同じで、市場こそ二人の友  
情とも恋愛ともつかない親密な感情を深める絶好の場所なので  
ある。それで二人はいつも「市の日にはきまつて」市場に行く  
のである。その市場で竜二はさまざまな朝鮮人の生活を体験す  
ることになる。家では禁止になつてゐる棒飴や、ブツギ（お  
好み焼き）などをカンナニからご馳走してもらつるところも市場  
なのである。また、なんの理由もなくただ一日中喧嘩をして朝  
鮮の人たちや憲兵に連行される独立運動志士を思わせるような  
青年たちもここで目撃することになる。そして、カンナニから  
朝鮮では好きな人に贈るといふ錢袋を作つてもらふことに約束  
してもらつたのも市場の中であつた。

朝鮮の市場というのは、朝鮮の街の中心になる場所である。  
とすると、水原の中心は当然水原市場になるのである。しかし、

商店街を中心にする日本人からみれば、水原の中心と思われる  
市場はただの陰湿で汚い場所にすぎないのである。つまり、日  
本人と朝鮮人とは全くその（中心）が異なつてゐるのである。  
湯浅文学には朝鮮の市場がよく登場するが、その市場こそ朝鮮  
の象徴的な場所である。『カンナニ』の中では、カンナニと竜二  
の親密な感情は市場を通して大きく成熟していく。そして、も  
つとも朝鮮的な場所であるはずの市場が、日本人の竜二にとつ  
ては親しみを感じる一番「安心」できる場所だつたのである。

二人の親密な関係には竜二のこのような市場への親しみが大き  
く関係している。こういう市場に対する親近感、後の『棗』  
と『心田開発』での金太郎にそのまま引き継がれ、さらに『市  
場』という随筆の中で湯浅克衛の朝鮮への強烈な郷愁として定  
着することになる。とくに『市場』では、作者は子供の頃から  
市場が好きだつたといひながら、水原の市場についてこと細か  
く紹介している。また、そこには「悪太郎三人連盟」にいじめ  
られ、その「くやしきや、淋しさ」から、よく市場の空家に行  
つて慰めた記憶が述べられている。ほかに、『市場』と『カン  
ナニ』においての市場の描写には深い関連性が窺われるが、こ  
こでは指摘にとどめておく。とりあえず、作品では、市場が竜  
二とカンナニを結ぶもつとも重要な役割をしてゐるといえる。

このように、水原という街は二人の親密な関係を深めるのに  
は欠かせない小道具として機能している。市場を中心にして、  
華川の川沿い、そして華虹門などがみなそうである。もちろん、  
これらの場所はいずれも水原市内にあり、正確にいうと二人の  
関係は城郭を中心にはぐくまれ、その城郭を中心にした街が彼

らの世界のすべてだったのだ。前述したように、水原はもともと城郭の街として造られ、以後発展して広がるが、その原型はあくまでも城郭に囲まれた城内と八達門に隣接した城下の市場である。そして、城郭はちょうど卵のような形で街を囲んでおり、その卵の黄身にあたる部分が牛市場になっていて、それが川沿いにつながる形で八達門城下の市場まで延びている。カンナニと竜二の関係はこの城壁を中心にはぐくまれ、なかなか城の外を大きく越えない。つまり、城郭が大きな境界線になって二つの世界をくぎっているかたちなのである。

しかし、そんなある日の夕方、二人は北門を越えて北池に釣りに行くことになる。その時、峠の向こうで聞こえる豊年祭の銅鑼の音に誘われ、その方に向かうことになる。

「行つて見ようよ」

カンナニが云つた。竜二は腰をあげて、峠に向つた。

「峠の向ふには、ほら、楽しい暮らしあるね」

「ああ、あるのんぢやろ、水原の街は、俺れ、嫌ひだ」

「ああ、いぢめられないところに行きたいね、竜ちゃんも二人だけで、いつも遊べるところに行きたいね」

そこで、二人は峠の向こうを目指すことになる。水原の外の峠の向こうに水原より「楽しい暮らし」のできる理想的な場所があると信じたからであろう。しかし、その峠に着いてみると、「祭のさんざめきは又違った方向から聞えた」のである。それで今度はそこに着いてみると「その向ふの峠は、その峠よりも、もつともつと美しい」のだった。それでさらに二人は「又その峠に向つて歩く」ことになるが、しかし、いくら歩いても、二

人だけで楽しく過ごせる場所はすぐ手に届くような距離にありながら、なかなか現れてくれないのである。

そして夜が深くなつた。道もわからぬ藪、抜け出ることのできない森林が続いた。竜二とカンナニは心細くなつた。

いつの間にかお月さんが出てゐた。お月さんの方が多分水原の街なのであらう、玲瓏とお月さんは輝いてゐた。

竜二はお月さんの鏡の中に、母親の顔を見たやうな気がした。

突然、「こんなことしてゐたら、猛獣に食べられてしまふ」と思った。不安が急激な速度で胸の中を揺り動かしした。

「帰るんぢや」

竜二はカンナニの手を取るなり、転ぶやうにして山を駆け降り、野原を横切り、河を渡つた。

結局、二人が目指した「楽しい暮らし」のできる場所はどこにもいなかったのである。城門の外の「峠」の向こうに、そういう世界があると思つて目指したが、それはあくまでも一つの幻想にすぎなかつたのである。二人のこゝういう幻想は、「夜」によつてむざむざにも破れ、二人は必死の思いで水原に戻ってくるしかなかつたのである。つまり、二人にとつて城門の外の世界は、一見幻想的に見えるが、実際は深い「夜」の「道もわからぬ藪」の「抜け出ることのできない森林」の世界だったのである。結果的に城門のなかこそ二人が一番安心できる場所だったのである。

しかし、このような二人の関係をはぐくんだ水原の街が万歳事件をきっかけにして大きな転換をむかえることになる。万歳

運動が始まってから何日か経って、「街の騒々しい声も」雪で「びたりと」静まったある日、二人は「山」に登って市内をながめることになるが、そこで万歳運動を目撃することになる。

さう思つて見てみると、城門の向ふの小丘にも、河をへだてた小松林の原にも、白い衣の人たちが屯してゐて焚火をたいてゐた。そのあたりから、次第に「朝鮮独立万歳」の声が街の谷を渡つて、山に響いてきた。

二人が登つた「山」は水原の背後を取り囲んでいる八達山であろう。その頂上から見た「城門の向ふの小丘」と「河をへだてた小松林の原」は、作品の内容と実際の水原の万歳運動の記録から推察すると、おおよそ八達門から孔子廟あたりと練武台や蒼竜門のあたりになると思われる。実際の水原の万歳運動の記録には、三月一日の大規模な示威以降「約二週間の小康状態が続いたが、三月十六日の市の日を利用して八達山の西将台に数百名が集まり、また東門のなかの練武台にも数百名が集まつて示威をした」という。カンナニと竜二が八達山に登つたのは、ちようどこの時期にあたるであろう。そして、いよいよ万歳運動が広がり、それを鎮圧する日本兵の銃撃が始まる。それで二人は教会のほうに向かつて避難するが、教会の中には入らず、方向をかえて逃げることになる。しかし、「白衣」たちが逃げ込んだ教会は日本兵によつて焼かれることになる。これは四月十五日に起こつた堤岩里の虐殺事件から題材をとつたものであるが、堤岩里は水原市内ではないが、作品ではそれが水原市内に設定されている。そして、教会も八達門と孔子廟の間にある実際のフランス教会があてられている。となると、作品での万歳

事件では、朝鮮人と日本兵がおもにこの場所の近くで衝突したことになる。内容の順序からは先になるが、作品では小学校の悪太郎たちが普通学校の女生徒をいじめる場面があるが、そのいじめる場所もこの辺に設定されている。今日でいうと、八達門と孔子廟の間でやや八達門よりの城外になる。朝鮮人が通う普通学校は城内（現在の新豊初等学校）にあり、日本人が通う小学校は城外（現在の水原初等学校）にあるので、城内に住む日本人生徒と城外に住む朝鮮人生徒は自然にこのあたりでぶつかることになつてゐるのである。また、万歳事件の当日、学校の帰りの日本人生徒と朝鮮人生徒が集団で取っ組み合いをするが、その場所もこの辺に設定されている。とすれば、八達門外から孔子廟の間は、朝鮮人と日本人の衝突の場所、おもに朝鮮人が虐待される空間としてはたらいいてゐることになる。

そして万歳事件の後、家に戻らないカンナニを探しに父と街を出た竜二は、華西門（西門）から長安門（北門）と華虹門を経て練武台に至り、その近くの松林の中からカンナニの血にまみれた小錢袋を発見する。カンナニは練武台の近くで殺されたのである。練武台というのは、その名前のとおり、兵士を訓練する目的で作られた場所で、古は将卒ここに武を練りしところ<sup>(9)</sup>であつたという。カンナニが日本兵に殺された場所は、このように非常に軍事的な性格のつよい場所だったのである。

## 5

以上からみるように、カンナニと竜二の親密な関係は水原という場所を抜きにしては語れない。水原という街が二人の関係

を維持させ、それを深めていたのである。しかし、水原という街は、二人にとってそれぞれ違う土台に立っている街なのである。竜二家にとっては新しく発見した安住の場所で、カンナ二家にとっては安住の地からしだいに窮地に追い込まれていく場所なのである。この根本的に対立した、もろい土台のうえで二人の関係は設定されていたのである。そして、表面的には城門が二人の関係をはぐくむ、あたかも一つの母胎のようなものとして、二人を城門の外の世界から守ってくれる役割をしている。水原に住んでいる時には、街の外の世界に幻想を抱いて城門を出ていくが、一端出てみると、外の世界は不安と危険に満ちた世界ですぐもとの城門の中に戻ってくるからである。しかし、このような二人にとってあたかも母胎としての役割をしていた水原という街が、万歳事件によつてカンナ二が殺されることになり、その一方が大きく崩れることになる。つまりカンナ二のいない、竜二だけの水原になってしまったのである。表面的には二人をはぐくんだ水原の街ではあるが、それは朝鮮人であるカンナ二を守る母胎ではなかったたのである。それは最初から水原という街の構造のなかに内在していた問題で、それが具体的に現実化された形でカンナ二の死として現れたといえる。それでカンナ二は水原から完全にいなくなるのである。カンナ二のいない水原で、竜二は朝鮮への想いを抱いたまま、一人で孤独に成長していくことが予想される。というのは、その竜二の姿を、後の『棗』で日本と朝鮮へのそれぞれの思いにひき裂かれる混血児の孤独な少年金太郎から窺うことができるからである。また、その同じ金太郎が『心田開発』では青年に成長し、

一人取り残されるかたちで水原の街に再登場しているからである。そして、『カンナ二』以後、湯浅の描く水原の中には、二度とカンナ二のような朝鮮人は見ることができず、カンナ二のいない水原の街は完全に日本人だけが住む街になってしまっている。

注

(1) 酒井政之助「発展せる水原」(酒井政之助、一九一四年)。この本には数多くの写真と統計資料や広告などが載っていて、当時の水原の面影を詳しく見ることができ。

(2) 酒井政之助「水原」(酒井出版部、一九二三年)。湯浅克衛の父親湯浅伊平の経歴をそのまま紹介すると、

・湯浅伊平氏・物産商會主、氏は明治十四年八月徳島県川島町に生れ同三十二年大阪府立数理義塾中学を卒業し後身を軍籍に投じ特務曹長に昇進退役後大正元年三月渡鮮以来商業に従事し今日に至る氏は一面選はれて水原実業協会の常務員其他の要職に当選水原の進展に努力中である。

参考的に著者の酒井政之助の経歴を紹介すると、

・酒井政之助(著者)訴訟代理業、朝鮮新聞水原支局長、水原学校組合会議員、水原実業協会法律顧問、水原電気株式会社監査役、新潟県人会長、水原読書會主事、等の現職にあり、著者は明治十八年八月新潟県直江津町に生れ、同四十一年六月中央大学を卒業、同四十三年九月渡鮮現業に従事。

(3) 『文学評論』(一九三五年)の「カンナ二」と戦後の創作集「カンナ二」(一九四六年、講談社刊)との移動については、任展慧「植民者二世の文学——湯浅克衛への疑問」に詳しい。一方、高崎隆治氏は「日本人文学者のとらえた朝鮮」(『季刊三千里』、一九八〇・春)で、戦前と戦後の「カンナ二」が「同じものであると言いつてもいい」とし、戦後の「カンナ二」は「作者の創作性のきわめて強い作品」であると指摘している。しかし、本稿では、いくつかの細かい単語の異同から湯浅文学の国策的な面を論じるものではないため、二つの「カンナ二」がその内容にお

いはほぼ同様のものであったとみなす。

(4) 『文学評論』の「カンナニ」の付記には、「この後半は『万歳事件』が扱はれてゐる」という徳永直の「附記」が記されている。

(5) 堤岩里虐殺事件は、一九一九年四月十五日、当時の水原郡郷南面堤岩里で起こった独立運動弾圧事件で、水原を中心としたこの地域の独立運動鎮圧のために差し向けられた日本軍が、訓示をすると呼して同里内の住民を教会の礼拝堂に閉じこめ射殺、建物もろとも焼き払った。死者はキリスト教徒、天道教合わせて二十九名であった。一方、柳寛順とは当時梨花学堂在学中の女学生で、万歳運動の際、故郷の天安郡の独立運動を組織して指揮をとったが、憲兵の発砲で負傷し逮捕され、後、獄中闘争を続けたが、病氣と拷問により十六才で獄死した独立運動家である。その壮烈な祖国愛で「朝鮮のジャンヌ・ダルク」と呼ばれている。以上、大村益夫外「朝鮮を知る事典」(平凡社、一九八六年)を参照。

(6) 山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』(岩波新書、一九七一年)を参照。

(7) 注(1)と同じ。

(8) 湯浅克衛『市場』(『半島の朝』所収)

(9) 『水原市史』(水原市史編纂委員会、水原市、一九八六年)

(10) 注(1)と同じ。

・資料

水原地図(一九一七年、一万分ノ一)

(ナン) ブジン 筑波大学大学院 文芸・言語研究科 日本文学

